

四先生の思い出

丹波地方と四先生

樋口繁一

田代先生

私が田代先生を慕うことは20年前の昭和4年10月27日河内の観心寺の採集会に始る。秋晴のこの日先生は例のゲートル姿に蝙蝠傘を片手に胴乱を肩にかけてニコニコ顔でお越になつた。この日終日お供をしてアブラ菊の黄色花を胴乱に詰めた記憶は今も明瞭に残っている。

兵庫県博物学会でも度々御指導を戴き、ことに昭和9年8月の丹波地方の夏期採集会には4日間連続で篠山、小金岳、神池寺、柏原等を採集して戴いた。其後水上郡の細見末男君と相謀り年に1.2度数年間に十幾回に亘り神楽村、篠峯、香良、福住村今田村等詳細に調査を願い、其の間同好の者と指導を受け、この方面に幾分なりと裨益し後輩学生を繰出させたことは全く先生の御蔭である。

例えば注意すべき植物として

ホンゴウソウ	福住村
トケンラン	大芋村
ホウライカズラ	畑村
スタコビル	神楽村
アズマイチゲ	犬山村

等の珍植物が丹波にその分布が明にされたことは、この頃でした。

田代先生と幽霊の想出がある。それは有馬郡永沢寺国有林の採集会の折、寺で泊られた。先生は別室で一人寝られ、我々は大勢次の部屋で寝ました。翌朝先生は昨夜はどうも胸を圧する感があつてどうも寝られなかつたと申された。寺僧はあの部屋は時々活埋堂で亡霊の出る部屋だと申しました。先生も前から少しも知らなかつたが確に何か変な感じであつた。あれが亡霊かと多少気味悪げであつた。後からもよく話された。先生の御音信のハガキは今も50-60通保存しているが太い丈夫な字を見る度に先生の広い額を思い出す。

阿部先生

阿部先生にお供して丹波を廻つた事が2.3度ある。或る時近村に安口と書いてハダカスと読む話をしたところ、それは面白い、必ずサンショウウオ(ハンザキ)に関係するにちがいない至急調査してみよとの事である。(会誌15号記載の通り)そして例の岡山県のハンザキ大明神の話から始まつて、ハンザキは脱皮の頃膚にオラオラした類のやうなものが着くのでハダカスと

云う。鼓簾と書くのだが略字で安口と書きハダカスと読む。はたせるかな其の村はハンザキの生棲地で安口岩が溪流にあり、その淵にはいつも1.2匹は居ると云ふことがわかつた。先生に一筆書を願つたところ

連は後から籠で来る 骸骨

とある何の意味か私には、わからないが骸骨は姫路中学での先生のニツクネームだとの事、先生のハガキ数通保存しているが特有の字は署名なくとも阿部先生たることはわかる程である。

山鳥先生

天然記念物の調査委員であつたので、よく丹波に御調査に来られた。その為巨樹、名木が明になつた。例えば後川村の野花菖蒲の野生地。小金岳のツクシ石楠の群落地。日置村のヨシノヤナギの巨樹目通り太さ4m日本一の巨樹。福住村の大杉、太さ8m 県下3位南河内村の大樺太さ7.5m等(兵庫県天然記念物調査報告第14輯記載)或は川代。丹波吉野鏡ヶ坂や柏原根木橋等を調査されたお供すると、話はいつも昔話で明治30年頃から大正にかけての生きた生物学史であつた。丘浅治郎先生から始まつて池野成一郎先生、平瀬先生、三好先生、佐藤伝蔵先生と次々と尽きる事を知らないようであつた。

先生の書を戴いたのに

石楠を見に行く朝の霧晴る 北斗

矢倉先生

大正14年丹波篠山の婦人会が矢倉先生を招いて教養講座を開いたことがあるので、先生は丹波を懐しがつてよくお越しになつた。いつも白足袋姿で丸万旅館に泊られた。

昭和12年6月6日丹波高仙寺山で陸産貝類の採集会を催した時も講師として御指導を賜りました。前日から来て泊つて戴き色々お話を伺つた。先生の貝類研究の動機を伺うと、私は若い頃古鏡を蒐集する内に、貝を貨幣にしている国があり更に貝を国のシンボルにしている国がある。印度の南端にあるトラバンコール国でシャンク貝である。こんな事から貝類の研究に入つたと申された。丹波は山国ではあるが波部忠重君のやうな貝の研究家も輩出しているのも誇りである。肝臓ジストマの中間宿主マメタニシを篠山で発見して一般の注意を起して下さつたこともあつた。先生は色紙に色々かたつむりを書いて下さつた。

會計幹事をしていた頃

神戸の私の家は戦災でなくなつた。自宅にあつた総ての物は灰になつた。私の記憶もその灰のように消えてなくなつて了つた。唯二中の校舎と共に私の21年の教員生活の遺骸の如く博物教室が残されたような気がする。昭和22年3月の学制改革の波は何の用意もなく裸のままに私を大久保町と云う所へ押し流して行つた。その二中も間もなく兵庫高校と改められて何のつながりもない中に室井君のみが唯一のつながりと思つている。

無一物の新制中学の創設に忙殺されて公私の整理も出来ず長らくして催促されて自宅へ持帰つた書類帳簿の中に兵庫県博物学会当時の會計帳簿があつた。私の會計は昭和10年頃東京へ転任になつた滝中の佐藤茂樹さんの後で克明に記入されていた會計簿の後を引受けたものの、中々年末は骨の折れる仕事をして来たものだと思う。表装も立派な帳簿であるので記念にと思つて残していたが先頃気がついた時には大学に入つている息子の本立に並んで、記入された所は切取られ残りが利用されているのを見出した。一寸相済まぬ気持ちである。

学会最後の役員会を兼ねて神戸の大神桜かの支那料理でやつたと思う。色々手伝つて貰つていた室井君も特別に参加して貰つた。記念写真は私が撮つたと思うが誰かが持つていると思う。

私が特に思い出の深いのは淡路福良の臨海実習であつた。京都大学の岡田要教授が紀州廻りで少し遅れて指導に来られた。早朝のブランクTONの採集、要塞地帯の磯採集、広い旅館での合宿、和やかな会合が目に見えよう。岡田教授の弟子とか若い婦人が特別に参

竹 中 茂

加し最後に和服で記念写真を一緒にとつたのも印象深い。阿部さんは晩は夜を徹して飲んでいられたと思う。

それから牧野先生を招いて兵庫県の最高峰氷の山に植物採集をしたことも忘れられない思い出である。私はこの時16mmに撮影して「牧野先生の風貌」と題して200mの小巻を作つた。あちこちの採集中も撮つた。さる所の荻の近くだかで釘付けになつたように研究に余念のない牧野さんの姿と共に骨張つた眼鏡をかけた色の黒い阿部さんの姿も眼に浮ぶようだ。暑い時分であつたが朝方田舎宿の主人の望みに揮毫してられるのも撮つた。あのフィルムは二中の暗室に置いて来たが今はどうなつているかしら。将来よい記念物となるだろう。それから城崎へ出て先生は西村屋へ泊られた。ここで阿部さんが君も一筆書いて貰えよと云われたものだから早速二枚書いて貰つた。それも皆焼いて了つた。ここでも阿部さんは朝から飲んでいられたと思う。それでいて崩れられなかつた。中々の酒豪であつた。自分から今は次席だが、酒の上では首席だと笑つて云われた。

1 正月には5日に何回かあの白鷺城の北にある坊主町の御宅で愛嬌のよい婦人会長で忙しくしていると云われた奥さんも出られて御馳走になつた。奥へ入つて新しい壘の二階でお酒を戴いたこと、白さぎの糞で白くなつている城の松も印象深い。そして松の内の寒々する町を歩いて駅へ出た連中に陸井さんもいた、大浦さんもいた、軽妙な話術に人を煙に巻く川崎さんもいた。さてその内の陸井さんは終戦後どうされたのかしら——私の駄弁もこの辺で一先ず終ることにしよう。

温 故 知 新 佐 藤 茂 樹

阿部先生と兵庫縣博物學會 思い起す昭和5年5月洲本で開かれた県中学博物協議会の席上竜野中学の陸井先生から、学会結成の動議があり満場これに賛成すぐに実行委員が挙げられ、その年の秋には第1回の総会が姫路中学で開かれ「我々の会は我々の手で」のモットーのもとに、阿部先生が推されて会長に就任されたのであります。先生は人格高潔で研究の深いことはもちろん献身的で、会の発展に御尽し下さいました。採集地の下見分にも地方で開かれる会場の下準備にも、直接御自身で出向されました。その都度よくお供した私は細かい御心遣いに深い感銘を覚えたのであります。赤字の填補にはポケットマネーを出され

る。又、有志を説いて淨財の寄附を仰いで下さる等それはそれは至れり尽せりでありました。

庶務幹事に学識豊かで円満な一中の難波、市川岡先生を、編集幹事として才幹縦横の陸井先生を役員に持ち、研究に熱心な会員同志の結合になつた兵庫県博物学会は、日と共に隆昌にその名声は本部の置かれた姫路の白鷺城のそのように輝かしいものであります。

会誌について見ますと創刊号は42頁9名の執筆者でしたが2号は倍の87頁、10号は121頁、15号233頁と躍進しました。記事の豊富な内容の充実した地方研究雑誌の白眉であつたことは自他共に許すところでありまし

た。私は会の創立当初から御世話頂き、各地での採集研究会にもほとんど欠かさず出席御指導を仰ぎ、大家の御講演を拝聴し、会誌を通じ会員諸兄の御研究を拜見し、これによつて直接に間接に、どれだけ啓蒙されましたか計り知ることができません。昭和12年3月東京へ出た私はその後どんないきさつで博物学会が、発展的解消をしたのかは存じません。

他山の石にもならぬ苦い経験 よそ事を申上げて恐入りますが、現兵庫県生物学会の隆昌と対比の資料として御祈しを願います。

東京の生物学会は現全国生物学会の中路正義会長が中心となつて、研究に調査に目覚ましい活動を続けていますが、私の在京時代は終戦前後の総てに恵まれない時ではありましたが、資金難で必要に迫られながら機関誌の発行を見ず。雑誌理科研究や採集と飼育にタイプアップして、ようやく会員の研究を発表するといった淋しい状態で満足するより外に致し方がありませんでした。

他に数学、物理、化学、生物、地学を一丸とした科学連合会が設けられ、上野の科学博物館その他で会合を持ち、科学振興の策をねつたわけであり、私も生物の方から理事会に出席しましたが、範囲が広過ぎてまとまつた業績は挙げられませんでした。

新制中学が発足してからは更に中学校理科学会が生まれ、全国的に横の連絡をするために機関誌の必要がさければ、私は中学にも係りを持つていました為に、誤つて編集部長に押されてしまいました。止むなく先ず原稿をと工業大学の先生に水晶と検波、中央气象台に畠山技師を頂わして気象を文理大の藤本治義博士に関東の地質といった貴い論文を頂いたのですが、資金の工面で愚図愚図する中に時を過し、その中私が再び元の古巣神戸に舞い戻つてしまつたので、お恥かしい次第ですがどうにもならぬ羽目に陥つてしまつたのであります。

兵庫縣生物學會と兵庫生物 ことさら申し上げる迄もありません。現物は御覧の通り毎年5月の総会、一昨年夏の坂越の採集会、昨年夏の明石に於ける講習会等の事業の盛大さは、とうてい他の追従を許さぬものでありましょう。

なお会誌兵庫生物が敗戦後経済最悪の事態にも係らず、かく迄整つたものを出された事は誠に驚異に価すべきものでありまして、森会長先生、紅谷理事長先生はじめ役員の皆様方、会員諸兄の御努力の程がしのばれるのであります。殊に直接編集の局に当られた室井先生、古川先生、支田面の衝に当られる栗谷先生の勞

に感謝せずにはおられません。

神戸市に自然科学博物館建設の望 私は昭和16年博物学会誌20号に、神戸市に博物館建設の必要を東京から申し送つて愚見を述べさせて頂いたのです。まる10年を経過した今日でも未だその夢を捨てかねています。室井先生に御願して望みの程を百舌欄に書かせて頂きましたところ神崎郡船津村の小林平一様から外国の鳥学者と交換するために採集し製作した鳥の標本を提供するから、是非博物館の建設に努力せよとの有難い御手紙を頂いたのです。未だお目にはかかりませんが、関西鳥学界の権威小林桂助殿と県下で唯二人の禁止鳥の捕獲を許されている篤学家と承知しています。

外国貿易の大玄関であり、特別国際港都である神戸市にこの種の文化施設があつても早いのではないかと思います。再建途上にある現段階で、直ぐには実現困難でありましょう。従いまして小から大をなす次のような計画は如何でしょうか。

先ず第一段として各地方各地域で、郷土の特色豊かな学校博物館を設けます。これは在来の各学校標本室準備室をこれにあてて所蔵の標本を新たな構想のもとに整理し解説し、更に補充すべきは補い、新しい着想から新製もして、博物館の使命を達するようくふうをこらします。今後作る標本はなるだけ(物によりけりですが)大きく美しく、特徴を備えたものを2つづつ用意し、中の1個は自校に他の1つは中央への提出用として準備します。

中央では生物学会の方が中心となつて委員を設けて頂き、全県下の自然物、自然現象等を高所から見渡し、一定の規格、規準を設け、具体案をひつさげて、県市の当局を動かし、一方地方の組織に御願いすることとします。

貴重な標本、尊い文献等は手放し難いものであり、個人の保存もさることながら、耐震耐火の確かりした場所に、責任を持つて保管されたら安心でありましょう。それが御寄贈願われるとしたら、その有難い芳志を熱心な研究家に対しお分ちするにしたなら更に一層効果的で、それがうまく活用されますならば、科学振興は期せずして達成されるものと存じます。

田代先生の御望みなされた植物分布目録の如きも、こうした総親和総努力によつて早くまとまることとしようし、夏休みの生徒課題の如きも、遠大な計画の一翼として実施されますならば、ひときわしがいのある、より良い結果を挙げ得ることと存じます。

兵庫縣生物學會に於て前兵庫縣博物学会、同中等博物学会に献身努力せられたる阿部前会長、山鳥、田代、矢倉諸氏の御功績を称える為め、記念号を發刊するから私にも何か感想を寄稿せよとのことである。私は阿部、山鳥、田代の諸先生とは特に御懇誼に願ひ居り、且つ御教示を賜つたことも尠くないので感慨深きものがあり、当時御活動になつた紅谷、室井、井上、川崎、佐藤等の諸氏が相変らず重要なる幹部として学会の隆昌を劃策して居られるので、不肖を顧みず筆を執らせて貰う次第である。

私の近況を申し上げますが、京都大学構内工学部鉱山学教室の南に鉱産資源研究所と呼ぶ二階建があつて、私は其の所長として原田博外15~6名の研究員と共に孜々として自然科学の研究にいそしんで居る。私は地学、特に応用地質学に興味を持ち聊かたりとも直接に文化に功獻せんと考えて居るのである。研究しつつある事項は次の3つが主要なものであります。1. 鉱山地質、鉱床地質、地下の地質調査及物理探査並に研究、2. 石炭、鉱地、鉱物並金属の分析試験及微量分析 3. 地学標本並実験研究、地学材料の撰定即ち是である。研究の傍ら委託研究をも都合のつく限り受託しているのであつて、私の考では大企業者はそれぞれ研究機関を有して居るが、中小企業者並個人企業者はそれ等の設備を保有し得ないので、それ等の人々の委託に応じて企業の合理化に寄与して居るのである。又学校に於ては教科書の選定及吟味は厳正であるが、自学自習又は実験用の標品、材料等は製作選定に於ては尙不十分なる現状にあるは教育を徹底し、効果を高める上に遺憾の点多きに鑑み、其の改善を目標として教育の効果を大ならしめんと理想を以て努力しつつあるのである。この点は学会に於て真剣なる御批判に興味と絶大の支援とを仰ぎ度いのである。近く神戸分室設置の筈であるから何卒御利用願ひ度い。次に私は過去30余年間終始一貫自然を伴侶として來ましたので、自然に対する私の解釈の一端を述べて御参考に供し度い。

悠久と目惹 大戦の末期から終戦にかけて人々には相當に常軌を逸脱した様相が窺われた。然るに大自然は惘然、自惹、昔ながらに春は桜花爛段、秋は錦繡の装いに何の代つた処もない。浮世を他所に悠然自惹たるものがあつて、古語に「國亡びて山河依然」の感を深からしめるものがあつた。人は生れ、人は逝く、然れども自然に悠久に生きる。

平等と公平 自然は平等で而も公平である。自

然を侮る者は老若男女貴賤貧富を問はず、公平に平等に之を懲罰する。不用意に雪中登山したる学生等の遭難したり、遊びを知らぬ者達が波静かなりと侮つて入水して溺れたりするのも自然を侮つた為めに自然から受けたる公平なる懲罰に外ならぬ。而してかかる懲罰を与えても大自然は全くそれに関与せざるが如く、或は白皚々たる山峯を見せ、或は油を流した如き平静なる海面を現わし全く知らぬ顔である。其の偉大さに不言の中に絶大の感化を与えずにはおかない。吾人は自然侮るべからず、周到に用意せざるべからず、自然に対しては敬虔ならざるべからずの感化を深からしめるのである。

寛恕と寛容 自然科学者が自然の一部を観察し、各般の材料を集めて研究結果の結論を得る。その結論が誤つて居ても自然は寛恕してくれる。若し人類界に於て是を非とすれば容赦なく非難を受けねばならぬ。自然科学者の安心感には寛恕なる自然を対象として思う儘に自由に題目を選んで自由に研究し得るといふ点にある。私は時々考えたことがある。それは生後何十年かの長き間住み馴れたる故山で相当よからぬ振舞をして夜逃げよろしく故郷を棄て去つた人々が、疎開とか何とかで都会に住むを得ず再び故山に歸るとき、故郷の山々は喜んで其の懐ろに迎えてくれる。都会で失敗し、落ちぶれたとき、都会で成功したとき己を慰安し己を歡喜してくれる慰安の場所は故郷の自然の山河である。

判断の基礎 私は常に自然を友とし、自然に親しみ、或は調査に、或は研究に、或は肉眼的に、或は顯微鏡的に或は化学的に研究を続けて居る。何れの方面から観察しても、自然界の森羅万象は人類界の諸現象と軌を一にして居ることに気がついた。宇宙法とでも言うべき一種の偉大なる一法則に支配されて居る様にも思うのである。それは無生物界も生物界も全く同一で、この二つの世界を區別することも誤りで、人類が行つた不自然なる分類法の誤謬だとも思うに至つた。只未解決なるは精神現象の一事であつて鉱物界に精神ありや、この点は不明、生物界の精神現象も亦未解決であるが如くである。しかし吾々自然科学者には分り難い分野である。

そこで私は自然も人類も同一の法則に支配されて居ると言う見解から、卓近な現象は人類界に於ける現象を考へて自然界に於ける事実を探索し、この反対に自然界の現象を見て人類界の問題を解決し、それが根本に於て誤つて居らぬとの確信を得るに至つた。鉱物界

にも社会性がある。2個、3個、5個という様に常に共存し、之を Diagenesis 鉱物界の共生という。共生して1つの社界を形成する中にも鉱物に貴賤の別がある。賤なるは常に吾人の眼に触れるが貴なるは容易に眼に触れない。賤なるを見て貴なるを探索する。この事実は鉱物探査の秘訣であるが、人類探査に於ても同様である。これに反して不和にして決して共存共生しない元素や鉱物もあることは人類世界と同じである。かかる例は枚挙に遑を持たない。

私は教育界には直接の縁を持つて居らない。処が偶然のことで一教育者の人から「現今の教科書に2種あつて、其の一は複雑な現象より始めて順次に基礎的現象を理解せしめる様に仕組んだもの、其の二は基礎的現象から、順次に複雑な現象を理解する様に作られたるものであつて、何れも検定済であるが何れを採用するを可とすべきか」との質問を受けた。私は直ちに「後者を可とする」と判定した。何故ならば自然界の万物万象は凡ては簡より複に向うて居る。植物界、動物界其他発生したときは單に1葉2葉に過ぎぬが、發育するに従つて複雑となり葉、枝を増し、花を開き、遂に結実する。これが自然の理法であるのであ

る。又強大なるものは弱小なるものに勝つ。これは自然の理法である。然るに天然資源の賦存に於ても弱小なる日本が強大なる世男を相手に覇を争うなどは自然の理法を弁えざる矛盾であつて自然の法則に反して居る行いと云うべきである。自然の理法に従うを「自然」と言い、従わざるを「不自然」と呼ぶ。不自然を行つて自然を克伏せんとするは絶大なる努力を必要とし、而も目的を貫徹し得ないと思ふ。

自然に親しむ 此の一文が記念号に適した感想とも思わない。しかし生物学を専攻する人、地学を専攻する人、物理学化学を専攻する人、医学を専攻する人、趣味を有し、之を研鑽し人類文化の発展と高潮に功献する点に於て目的は同じである。分け登る麓の道は異れど同じ高嶺の月を見るのである。自然科学の研究は永遠にして平和、高遠にして無窮、世の繁華を避けて、悠久なる大自然を対象として静かに研究を楽しむ処に深遠なる妙味がある。逝きし人々も、生ける人達も同じ目的で研究に励み、宇宙の秘扉を開き行かれ又之を継承しつつあつて其の偉大さと崇高さを思い歡喜に堪えず拙稿を寄せた次第である。

(京大鉱産資源研究所長工博)

64頁より続く

は小坂の竹下英一先生のお宅であつたが其年月日もとんと覚えがなかつたが、これも八尾在勤中の事であるから大正の終りである(竹下先生は樟蔭女子専門学校の先生で大阪植物同好会幹事)初対面で山鳥先生は温厚謹厳な先生だと思つた。奇しき縁で後年先生に当校に(濶中)お世話にならうとは其時は夢想もしなかつた。それから間もなく私は秋田県の館代中学に転じ病氣して郷里八戸に静養していると昭和3年8月山鳥先生から飛電があつて当校に御世話になつたのである。

私が当地に来てからは魚崎と西宮で近くもあるし、牧野先生が当地に来られるとよく西宮女学校で腊葉を作られたのでちよいちよい御邪魔をした。牧野先生御指導の採集会には山鳥先生とよく一緒にあつた。殊に印象に残っているのは瀨へ行つた時瀨の奥の旅館で河鹿を聞き乍ら一緒にビールを飲んだ事である。景色もよいし河鹿を聞きながら飲むビールは甘かつた。山鳥先生はテニスが好きであつた。学校へ訪ねて行くとよくコートで先生達とスマートな長身にラケットを手にした姿は誠によく似合い運動家らしい姿であつた。先生は俳句も好きで学校でも職員、生徒と共にやつて居られたので名士の短冊も沢山所蔵して居られた。始め

は野田前天楼先生の指導を受けて居られたが、後では横山曇楼先生が行つて居られた。それで先生の著六甲山の植物の中には北斗の号で多くの句が載せられている。先生は謹厳でありしやれなど云われなかつたが、蓮の花が開く時音がする、しないで一時やかましい問題が起つた折こんな狂歌様の歌を作つて見せられた。非常に面白いので早速短冊に認めて頂いている。それは

不忍の池に忍びて蓮の音を

聞きしに花は音なく咲く 北斗

と云うのである。山鳥先生は實に博學であり、勉強家であつた。語學はフランス語もやられたと云う事である。動物の方はクモ類を相当くわしくやつて居られたし、淡水魚も広く採集して居られた。動物や鉱物の本を書いて居られるのに最も我々が造詣が深いと思ふ植物の著書がなかつたが晩年に「隨筆の植物」、「六甲山の植物」を続け様に出されて、我々植物同好者を裨益して下さつた事は誠に有難い。昭和12年に兵庫県中等教育植物学会が創立されその会長として大いに活躍された事は大方諸賢の既に御承知の事である。あんな元氣な先生が昭和21年2月急逝された事は兵庫県生物学界の爲めに誠に痛惜に堪えない。